

子宮がん検診（神奈川方式）

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年日母設立20周年を記念して神奈川県産科婦人科医会との協力事業としてスタートしたものである。県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について鏡検・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

精度管理については、当該医療機関の協力により精密検査対象者についての追跡調査が当協会の臨床検査部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

平成25年度は、一部の医療機関が自施設内で鏡検・判定を行うようになったことなどから、頸部検診において検査数23,783件（前年比-4,333件）、受診者数22,039名（前年比-4,451名）で、前年に比べ約16%減少している。

方 法

神奈川方式による子宮頸がん検診は、細胞診の報告様式をベセスダシステムとクラス分類の併記報告に変更して5年目を迎え、平成25年度よりはベセスダシステム単独報告に移行しています。また、精密検査結果は、病理診断の国際基準に従い子宮頸癌と上皮内癌を分類し表記しました。標本評価による不適正件数は20件（0.09%、前年度72件0.27%）で、減少傾向にありますが、今後の子宮頸がん検診のより判定精度を高めるために、液状化細胞診（Liquid based cytology）の早期導入が望ましいと考えています。

子宮頸がん検診

平成25年度の頸がん検診受診者総数は、22,039名（前年度26,490名）で、前年より4,451名（16.8%）の減少でした。平成25年度からASC-USの症例も追跡調査を行い、異形成30名（軽度25名、中等度3名、高度1名、腺異形成1名）、良性疾患4名、異常なし34名の結果が得られました。

がん確定数は54名（前年度53名）で、その他のが

んを除く、頸がん確定者は52名（0.24%；前年45名0.17%）で微増でした。年代別では、20歳代9名（0.25%）、30歳代18名（0.30%）、40歳代11名（0.24%）、50歳代6名（0.21%）、60歳代6名（0.21%）、70歳代2名（0.10%）で、30歳代にがん発見率が若干高い傾向を認めますが、20～60歳代のデータは、平均的ながん発見率といえます。特に20～40代では上皮内癌26名（28名中）、上皮内腺癌2名（2名中）で、早期がんの占める割合が高く、当年代の受診率の向上が望まれます。

子宮体がん検診

平成25年度の子宮体がん検診受診者総数は、6,105名（前年度6,615名）で、陰性5,895名（96.56%）。陰性・再検4名（0.07%）；異常なし1名、良性疾患1名、追跡途中2名。疑陽性36名（0.59%）；体がんⅠ期6名（0.10%）、Ⅱ期以上1名（0.02%）、重複癌（体癌+卵巣癌）1名（0.02%）、内膜増殖症2名（0.03%）、頸部異形成2名、異常なし16名、追跡途中4名、受診状況不詳4名。陽性8名（0.13%）；体がんⅠ期2名（0.03%）、Ⅱ期以上2名（0.03%）、頸癌1名、乳癌転移1名、内膜増殖症1名（0.02%）、追跡途中1名。判定不能162名（2.65%）でした。その他のがんを含むがん発見数は14例（0.23%）で、すべて50歳以上でした。

病理組織検査結果

25年度の病理組織検査件数は、353件（前年度341件）でした。病理診断結果は、子宮頸部扁平上皮癌9件（2.54%）、扁平上皮内癌22件（6.23%）、頸部腺癌2件（0.57%）、高度異形成3件（0.85%）、中等度異形成21件（5.65%）、軽度異形成72件（20.40%）、体部腺癌6件（1.70%）、異型内膜増殖症1件（0.28%）、内膜増殖症8件（2.27%）、その他の良性疾患193件（54.67%）、異常なし12件（3.40%）、診断不能は4件（1.13%）でした。

関係の集計表は97頁に掲載